

第34回全日本少年サッカー大会長崎県予選テクニカルレポート

報告 長崎県サッカー協会技術普及委員 廣田竜彦

1 大会概要

期間 2010年6月12日～20日(3日間)

会場 雲仙市立総合運動公園グラウンド

長崎県立総合運動公園陸上競技場 他

ワールドカップ開催と日を同じくして、長崎県でも全国大会への熱戦の火ぶたが切って落とされた。全国大会予選にふさわしく、県内でも有数の芝生グラウンドで子どもたちも思いっきりプレーすることができた。このような素晴らしい環境を提供していただいた雲仙市サッカー協会様、また雨天の中に決勝戦の会場設営等をしていただいた諫早市サッカー協会様への感謝もプレーは忘れないでほしいものである。

2 大会結果

優勝 あぐり西町FC(長崎市)

準優勝 キックスFC(大村市)

第3位 竹松SSS(大村市)

深江SSS(南島原市)

優秀選手

大久保亘輝 斧澤隼輝 松尾亮汰 井手千紘(あぐり西町)

馬場堅伸 徳永桂大 高木太雅 (キックスFC)

松崎颯太 境臣太朗 (竹松SSS)

水田捷斗 江川豊輝 (深江SSS)

3 全体の印象

全日本少年サッカー大会という全国大会に通じる本大会においては、どのチームも全国大会を目指す気迫が感じられた。カウンターやポゼッションなど幅広いチームカラーが見られた。チームコンセプトの追求が行われれば、来年の九州少年長崎県予選ではさらにレベルの高い戦いが見られることになるだろう。

<守備に関して>

・どのチームも各地区予選を勝ち抜いてきているだけあり、ボールへのアプローチがしっかりできていた。積極的にボールを奪う意識が高く、コントロールミスなどから攻守が入れ替わることがあった。

<攻撃に関して>

・シンプルに前線にボールを蹴りこむチームも見られたが、多くのチームがポゼッションにチャレンジしていた。ただし、コントロールミスやパスミスなどが多く質の追求が不十分であった。

・サイドを使う意識は多くのチームがもっていた。しかし、サイドまでにボールを運ぶもののそこでキックミス・コントロールミス・判断ミスなどが原因でノッキングが起こり、フィニッシュに行くまでには至らない。無理な突破を図り失うのではなく、もう一度攻撃を組み立て直すプレーが少なく感じられた。

4 課題

「ボールが落ち着かず、攻守がめまぐるしい」

原因1:簡単にボールを失う

・ボールに寄れていない

・動きながらのコントロールができない

原因2:ボールポゼッションができていない。

・良いポジションが取れていない

・素早い攻守の切り替えができない

・縦を急ぎすぎている(パス・ポジション)

・運動量が少ない

5 課題の改善に向け

上記の課題の改善に向け、今一度「サッカーの基本」に立ち返る必要を感じる。

サッカーの基本

周りを観る:観る 考える 動く

ボールに寄る:正しいポジショニングから

パスしたら動く:効果的な場所に・効果的なタイミングで

ボールを奪う:個人で・グループで・チームで

「育成のサッカーはしつけである」と言われる。選手のプレーを評価し価値づけ、習慣づけを行いながら無意識でできるようにしてあげるのが、われわれU-12年代の育成に関わる指導者の役割ではないだろうか。

6 終わりに

子どもたちは未完成のプレーヤーであり、もちろん失敗もする。

「親は子の鑑、子は親の鏡」つまり選手ができないのは、われわれ指導者が「サッカーの

基本」を教えていないからではないだろうか。私自身1人のコーチとして、子どもの失敗を嘆く前に自分自身の指導を見直し次の大会につなげていきたいと思う。また、われわれコーチの眼に映っているものは目の前の試合だろうか、それとも目の前の選手だろうか。

「勝つ事と育てる事は矛盾すると同時に矛盾しない。コーチはその矛盾の間に生活している」と元日本代表監督イビチャ・オシム氏は言う。チームを勝利に導きながらも、選手を育てていくことこそが指導者の役割である。「クリア1回でパスとコントロールの数回分を行う機会を失うことになる」とウリエ氏は述べる。緊迫した試合の中でもリスクを恐れずポゼッションにチャレンジさせ、多くの失敗と成功を経験させつつ試合に勝つ喜びを与える指導者でありたい。それこそが長崎県全体のサッカーのレベルアップにつながり、大久保選手に続くワールドカップで活躍する選手の育成につながるのではないだろうか。

すべては選手のために“Players First!”

